

ノート

学生相談室報告 (7)

額 額 康 兵

Report from the Counseling Room (No. 7)

Kohei KOKETSU

The 7th annual report of the Counseling Room is done from a little different direction to keep a sharp watch over our society nearly at the *fin de siècle*.

今回は、例年おこなってきた報告とは別の角度から雑感的に記してみたい。最近よく考えるのは、「いったい人間にとってもっとも大切なものは何か」というあまりにも基本的な問いである。我々が生きていく上で究極的に大切なものが何であるかということは個々人により異って当然であるから、その是非を論じる意図はない。ただ、多くの学生や一般の人達と接する場合にはほとんど例外なく感じさせられることは、なんと多数の人々が予備的な関心（たとえば物質的なもの）に支配されて生活しているかという点である。そこで人間の究極的関心と予備的関心に焦点を当てて簡略に記してみたい。

究極的関心と予備的関心

究極的関心および予備的関心という言葉を用いたのは、ドイツから米国に亡命した神学者のパウロ・ティリッヒであった。ごく大雑把な表現を許して頂くならば、西洋の伝統的思考形態によると、宇宙全体は一定の秩序をもって動いており、それと同時に我々が社会生活を営む場合にも必然的に一定の方向（この場合、倫理）が存在すると考えられてきた。もっとも、ハイデッガーの実存哲学の影響を受けて以来西欧の思想もかなり大きな変化をみせたのであるが、それでも依然として西欧社会の人々の中には「宇宙の秩序と人間の行為」が中心課題として意識的にしろ無意識的にしろ存在していると思われる。

「人間はなぜ存在するのか」という問いに対して、西欧の思想家達はギリシャ以来常に最大関心事として抱えてきたといえる。人間存在の意味が曖昧では現実の生活そのものに不都合が生じると考えることは彼らにとって当然のことだったのである。さまざまな背景があると思うが、人間が生きていく意味を問うときに、基本的には人間の意識を予備的関心と究極的関心に大別したのである。簡単にいえば、前者は我々人間の生活であり、後者

はキリスト教の神である。この二元的発想法は、ある場合には多くの人々に有効に機能した。しかし、歴史に刻まれている人間の行為、特に第二次世界大戦以後の人々、わけても若い世代は神と人間という二元的な発想法に疑問をもつようになった。まず第一に「神」から出発してすべてのことを考えていく西欧人のやり方は、現代においてかつてないほど大きな二律背反を惹起した。

現在の日本はどうであろうか。めざましい経済成長は、たしかに日本人の暮らしを豊かにした。金銭に糸目をつけさえしなければ、ほとんど何でも手に入れることができる世の中である。反面、人間は何のために生きるのかと自問することも少なくなり、生きる意味すら希薄に感じられさえする。人間は、究極的関心をもたずに予備的関心だけで一生を過すことがほんとうにできるのだろうか。いや、東洋、特に日本には「心身一如」の考え方があるから西洋の二元的発想法とはちがいが、あえて人生の意味とか存在の意味を問わなくてもやっていけると思われるだろうか。しかし、日本でも第二次大戦後の状況は確実に工業社会に変貌した。人々は自己の存在の意味を問うのではなく、「もの」を生産すること自体に意味を見出した。工業化がいつそう進んだ現代社会において西欧世界の「神と人間」という発想法が漸次風化してきたのと同様に、日本においても仏教の説く「心身一如」の考え方が同じ運命を迎っているのではないだろうか。

工業化社会

自然科学の領域における事象は、普遍的要素を大前提とし、人類社会に共通のものである。しかし肉肉なことに、現在この地球を棲み処^かとしている生物としての「ヒト」ということになると、非常に巾広い生活形態で分布している。いわゆる原始に近い生活形態を示している民族から高度な科学技術を縦横に駆使した環境で暮している民族まで、同時限で同一地球上に存在している。同じ

ホモ・サピエンスではあってもこれだけの差があると、いくら普遍性をうたう科学的真理といえども原始的生活をしている「ヒト」に高度な技術を即適応させることなど不可能である。それは真に普遍的であると言えるのであろうか。人間とはこうあるべき、と従来断定してきたことが果して正しかったのか、という疑問が生じる。N・ベルジャーエフの『人間の運命』は、人間が神を信じ、信頼すればその社会と民族は平和裡に過すことができるとする思想である。けれどもJ・シェルの『地球の運命』は、このまゝでは地球や人類そのものが消滅するというものである。この二冊の書物が似たような標題でありながら人間の未来に関して全く正反対のメッセージを我々に伝えているのは、前者の年代的な制約を考慮しても、なおかつ皮肉としか言いようがない。一方が「人間」というミクロ的な視点から問題を論じているのに対して、他方は「地球」というマクロ的なものを問題にしている。現代という時代はもはや人間などというミクロ的な思考が不可能になっているのだろうか。しかし、果してそんなことが真に現実たり得るものものなのか。未だ、個々の人間の究極的目標さえ明確になされていないというのに、マクロ的な思考が人間にとって可能なのだろうか。なぜ、このように一見矛盾した問題に現代人は直面しているのだろうか。おそらく、ルネサンス以降に自然科学と人文科学が大きく分離した結果ではないかと考えられる。それ以後、多くの人々は日常生活においても自然科学が万能であると確信し、科学的・合理的であることをもって「是」としてきた。自然科学が人類になした貢献は測り知れないものであり、何人もこれを否定することはできないであろう。しかし問題は、自然科学の中には人間に対する定言的命法を有していないということである。簡単に言うと、「如何に生きたらよいか」というような人間の精神的な生き方に対する処方箋がないのである。自然科学を基盤とする工業化が進展すればするほど、その渦中にある人間はますます疎外されるであろうし、人間らしさを失っていくであろう。工業化社会の中で人間が働き、「もの」を生産する図式は今後も続くであろうが、人間の欲望は無限であるのに比して地球の資源には限界があるとするならば、いったいこのギャップをどのように埋めていけばよいのか。「最大数のための最大幸福」をこそ、工業化社会に生きる我々は真剣に考える必要がある。人類が直面している様々な問題は、環境破壊、軍核競争、人口問題、エネルギー危機、食糧問題、etc. etc. —いづれをみても一個人が担うにはあまりにも大きすぎる。各国の政治家、大企業家、科学者、そして地球市民たる全ての人々が、それぞれに責任を問われている。我々がどのような社会に生きようとも、人間として

の究極的関心を見出せないのなら、あるいは見出そうとする姿勢を放棄するならば、相対的な生き方に終始するのであろう。その是非は別としても、フロイ德的な解釈をすれば、相対的な生き方をしている人間には自己分裂を起すことが多い。しかも、さらに悪いことに人間は相対的な生き方が自己分裂をもたらし、また自己分裂そのものを意識できないということである。

学生達の話の聞き終えた後、相談室でしばし考えこんでしまうことも多々ある。社会現象、政治・経済、地域社会、さらに国際関係にまで思いを馳せると、今日の学生達が20年、30年を経てもなお同じように豊かな物資を保障された社会があるのだろうかと心によぎる暗雲をこの雑文に託してみた。

最後に、現代の神学者カール・ラーナーの言葉を引用して結びとしたい。

「今日膨大な人口にのぼりつゝも具体的な一体を成し、新しい社会形態を必然的に持っている人類は、愛することを全く新たに学ばなければならない。さもなければ人類は滅亡してしまうだろう。」(田渕文男訳)

付記：過去1年間に学生相談室で扱った件数を相談内容別に集計したものが下表である。

併せてご参照頂きたい。

相談内容別取扱件数

(昭和58年1月17日～昭和59年1月16日)

相談内容	件数	%
1. 学生全般(留年など)	100	29.4
2. 精神衛生	27	8.0
3. 学生生活	129	38.1
4. 人間関係	23	7.1
5. 進路問題 (専攻、就職など)	42	12.4
6. 健康問題	18	5.0
計	339件	100%

(受理 昭和59年1月17日)